ピレリスーパー耐久シリーズ　2018

第１戦　SUZUKA　“S 耐”春の陣

RACE　REPORT

2018 年　３月 30 日～4 月１日

鈴鹿サーキット

このプロジェクトは下記のパートナー企業に支えられています。

スーパー耐久レース 2018 年シーズンが 3/30 から開幕しました。実に 2008 年以来 10 年ぶりとなる鈴鹿開幕戦です。今シーズンは「ピレリタイヤが公式サプライヤーとして採用」されました。

また、今年の鈴鹿戦は、昨年よりも 1 時間長い 5 時間耐久レースとなり、決勝レースへの出走台数も予選落ちなしの 52 台と混戦が予想されます。2017 年度シーズンを総合 2 位で終えた#24 は、二度目のシーズン総合優勝を勝ち取るため、開幕戦を勝利で収めることができるかどうかに注目が集まりました。

◆レース結果

3 月 31 日（土）　公式予選　晴れ　気温：24.5℃　路面：49℃

前日のフリー走行でもトップタイムを刻み、迎えた予選。タイヤとマシンセッティングのバランスが決まり、A Driver の内田選手、B Driver の藤井選手ともに好タイムを出し、合算タイムにより 1 位で予選を通過しました。

2016 年シーズン以来のポールポジションスタートとなりました。

4 月 1 日（日）　決勝　晴れ　気温：21℃　路面 40℃

Pos.	No.	Team.	Type	Laps	Total Time
1	99	Y's distraction GTNET GT-R	R35	133	5:00'06.872
2	24	スリーボンド 日産自動車大学校 GT-R	R35	133	5:00'21.415
3	777	D'station Porsche	991	133	5:01'25.772

予選に続き晴天に恵まれた決勝日。藤井選手がスタートドライバーを担当します。今シーズンより導入された FCY（フルコースイエロー）もレース開始直後から発動されましたが、危なげなく 1 位のポジションを守り 35 周目で平峰選手にドライバー交代します。その後も FCY の発動がありましたが、順位を落とすことなく 72 周目でピットインし内田選手へと交代しました。この時点で 2 位の#99 と順位が入れ替わります。その後#24 は#99 との差を詰めてトップ奪還を狙いますが、オーバーランによるタイムロスや接触によるドライブスルーペナルティにより#99 との差を詰めることができないまま、98 周目に平峰選手にドライバー交代しました。そのまま 133 周を走りきって 2 位という結果でレースを終えました。

プラチナドライバー、ジェントルマンドライバーには走行時間の規定が設けられており、タイヤの変更、FCY 導入など、チャレンジ要素の強い今回のレースでしたが、3 人のドライバーの手堅い走りとマシンセッティングをしっかりと合わせてきたチームスタッフにより、開幕戦 2 位という結果で幕を閉じることが出来ました。

◆学生の動き

今回は栃木校、横浜校、愛知校、京都校、愛媛校の学生が参加しました。各学生が協力してチームを作り『開幕戦 5 校連合学生スタッフ』体制を構築しました。学生は統括グループ、テクニカル・マネジメントスタッフ、ドライバーサポートスタッフ、広報スタッフの 4 つに分かれて活動しました。

1. テクニカル・マネジメント

担当学生は「テクニカルスタッフ」「マネジメントスタッフ」の 2 つの役割をシフト制の交代で行います。

「テクニカルスタッフ」は主にピットでの作業の手伝いをします。アライメント調整と清掃、タイヤ管理やホイールの清掃、燃料給油の補助、車両清掃など実際のレース車両に携わる仕事をしました。また、車検場まで車両を手押しして車検の手伝いも行いました。

学校、学年、経験に関係なく、学生がそれぞれメカニックから割り振られた仕事に必死に取り組み、常に周囲で手伝える仕事がないか探しては主体的に動いている姿が印象的でした。

「マネジメントスタッフ」は主に、ホスピタリティルームでスポンサー企業様をおもてなしします。部屋の設営から始まり、レース当日にはお客様への配膳、飲み物提供なども行いました。

また、ピットウォークでの活動も行いました。ピットレーンにて旗を持ちながら#24 の応援を呼びかけ、パンフレットやステッカーを配りました。

◇テクニカル・マネジメントスタッフ　インタビュー

・2 班班長　3 年　藤木 一誠

チームでの連携、伝達が活動の中でとても重要でした。班員の考えを尊重しつつ、自分の考えをどうすればうまく伝えることが出来るか。また、どうすれば班員がうまく動いてくれるかを常に考えていました。

時間を重ねるごとにチームでの絆が深まっていき、一人で活動しているわけではないことを改めて感じることが出来ました。

・4 班班長　3 年　宮内 秀喜

5 校での活動だったので、各校それぞれの活動への取り組み方や良い点を学ぶことが出来ました。

テクニカル班での活動は久しぶりでしたが、前回参加のときに広報で取材をしたり動きを見ていたため、作業は滞りなくできました。しかしピット内ではチームワークも求められるため、周りを見て動いたり的確に指示を出すのが難しかったです。

2. ドライバーサポート

担当学生は、ピットにてドライバーやチームの身の回りの世話を手伝います。ドライバーの飲み物や装備品の準備、チームの食事の準備を行い、走行時間中はドライバーの出走準備の手伝いもしました。

また、ピットウォーク中にはドライバーのサイン会のお手伝いや、グリッドウォーク中の傘持ちなどもさせていただきました。

◇ドライバーサポートスタッフ　インタビュー

・2 年　本美 璃乃

２回目の参加なので仕事内容を理解していました。自分の仕事だけでなく、ピット内で周りを見て動くことができました。チームの方が私のことを覚えていてくださって、前回よりもさらに詳しくマシンのことやレースについてお話しすることができて貴重な経験になりました。ドライバーと直接関わる仕事なのでとても緊張しますが、やりがいのある役割だと思います。

3. 広報

担当学生はピットやホスピタリティルームで活動する学生の様子や、コースで走行するマシンの撮影を行います。またインタビューのアポイントを取り、質問させていただきながら撮影します。そして、集めた情報を使って、学生の活動内容やレースの内容をレポートにして報告します。

今回は「ドライバー」さん、KTR チーフメカニック「武田」さん、ピレリモータースポーツのマネージャー 「五木田」さん、 NISMO 総監督「田中」さんにインタビューをさせていただきました。質問を考えるのは難しかったですが、皆様から貴重なお話を沢山聞かせていただくことができました。

◇広報スタッフ　インタビュー

・2 年　福島 澤平

５校合同での活動は初めてで初対面の学生と協力して作業ができるか不安でしたが、スムーズに仕事の割り振りもできて撮影が行えました。撮影担当の役割として、どうすればうまく撮れるか、学生とインタビューを受ける人との配置などを決めるのが難しかったです。また、急な取材が入って慌てましたので、次回はうまく対応できるように頑張ります。

◆ドライバー　インタビュー

ドライバーさん 3 人に予選終了後、インタビューさせていただきました。

Q1.タイヤ変更に伴って、マシンの乗り心地は変化したか。

Q2.今年度の抱負

・内田選手

1. 昨年度までとタイヤが変わり、マシンセッティングも変更していかなければならない。うまく合った結果が予選 1 位にも出ている。
2. 最終戦まで勢いをもって、日産自動車大学校の皆さんの前でもう一度チャンピオンを獲得できるよう頑張っていく。

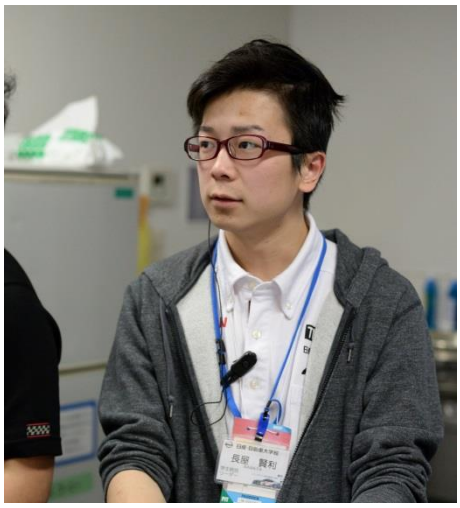
・藤井選手

1. タイヤの特性に合わせてセットアップを変更し、その結果がテスト日のタイム、予選にも出ている、仕上がりは悪くない。レース中でのエンデュランス（耐久性）がどの程度か注目している。
2. 昨シーズン開幕戦はポールポジションを逃したが今回は獲得でき、貴重な 1 点を獲ることができた。毎回ベストを尽くし、優勝を目指すしかない。

・平峰選手

1. タイヤ変更によってマシンの乗り心地も変化した。3 人で話し合いセッティングを決めていく。
2. 予選ポールポジションで獲得できた 1 点は重要なもの。僕たちの持つチーム力を全力で出し切って頑張っていく。

◇統括学生　インタビュー



・愛知校　統括　3 年　長屋 賢利

人をまとめる仕事は難しく、班長やリーダーとコミュニケーションを取って、いかに活動を効率よく回すかに尽力しました。各校統括の 5 人でも意見がまとまらず、自分の意見を理解してもらうことに苦労しました。

参加を重ねるごとに自己の成長を感じ、活動後の達成感はここでしか得られません。今後も参加し、さらに挑戦を続けたいと思います。

◆Bosch Engineering 授業

Bosch Engineering 様より、会社の沿革、モータースポーツとの歴史や、現在参戦されているカテゴリ、代表的な製品について詳しく教えていただきました。

わたしたちが普段使っている乗用車にも次々と新しい技術が搭載され続けていますが、そうした技術は世界中で行われているレースやそこに参戦するマシンからの関わりがとても深いことを改めて認識することができました。

◆広報後記

シーズン開幕、5 校連合という特別な環境の中であらゆる立場の方にインタビューさせていただき、各々がこのレースに対して自己の役割を見つけ努力していること、そして誰もがこの活動の成功を願っていることを改めて強く感じました。その熱意を少しでも言葉と文字に著し、伝えていきたいと考えます。

最後になりましたが、この活動をあらゆる形で応援してくださる皆様に改めて感謝を申し上げます。

ありがとうございました。

レポート作成　日産自動車大学校　学生広報チーム

福島 澤平、中村 美咲、三浦 夏樹、田中 翔大、芝田 郁実